様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　４ 日現在

機関番号：３４３１６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｋ００００２１

研究課題名（和文）アウグスティヌスとトマス・アクィナスの正義論とその現代的意義の基礎的研究

研究課題名（英文）A basic study of the theories of justice of Augustine and Aquinas and their contemporary relevance

研究代表者
山口　雅広（Yamaguchi, Masahiro）

龍谷大学・文学部・准教授

研究者番号：２０６４６３７７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、西洋中世のふたりの神学者・哲学者アウグスティヌスとトマス・アクィナスの、正義を中心とする哲学的・倫理学的学説と、その現代的可能性とを明らかにすることを目指して取り組まれた。特に重要なその成果は、第一に、人間が他の動物を支配することは正しいのか、という環境倫理学的な問いに対するトマスの答え――原則的には正しいとはいえ、無条件的にではない――を提示したことである。第二に、人間がものを食べたり飲んだりすることが正・不正を問われるのはなぜかという、食倫理学的な問いに対するトマスの答え――人間は飲食においても理性の秩序に従い、美徳を身につけなければならないから――を明確にしたことである。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究成果の学術的な意義は、二通りの仕方で述べることができる。すなわち、狭い意味では、西欧中世哲学において人間が持つべき他の動物との関係を明確にしたり、人間の飲食にかんする徳論と法論の関係を究明したりできたことに、その意義は認められる。さらに、広い意味では、西洋中世哲学の以上のような立場から、現代の環境倫理学的あるいは食倫理学的な問いに対する一定の回答を提示できたことに、その意義はある。つまり、本研究成果の学術的な意義は、人間はどうあるべきかという哲学の根本的な問いと、こんにちにおける身近な環境倫理問題や食倫理問題との関連を明示できたことにある。

研究成果の概要（英文）：This study aims to clarify the philosophical and ethical doctrines centered on justice as proposed by Augustine and Aquinas and to explore their relevance in contemporary contexts. Notably, the research highlights two key findings: first, Aquinas addresses the environmental ethics question of whether it is just for humans to dominate other animals, concluding that while it is fundamentally correct, it is not unconditionally so. Second, the study clarifies Aquinas's response to the question of food ethics; specifically, why the acts of eating and drinking can be considered just or unjust, emphasizing that humans must adhere to the order of reason and cultivate ethical virtues in their consumption of food and drink.

研究分野：哲学

キーワード：倫理　正義

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

西洋中世の正義論は、現代正義論の文脈において、社会契約説的な正義論を批判的に検討する上で不可欠な論点を提供する思想的な源泉として注目される。だが、そこにはこんにちでも十分に研究・紹介されないままでいる重要な他の論点も含まれる。そこで、アウグスティヌスとトマス・アクィナスのような、西洋中世を代表する哲学者たちの正義論が持つ可能性と、その現代的な意義を示す研究を実施することにした。

２．研究の目的

本研究の目的は、アウグスティヌスとトマス・アクィナスの正義論を考察し、現代に通じるような、そこに含まれる優れた可能性を提示することである。特にトマスの理論に力点を置き、これをリパブリカニズム（共和主義）的に解釈したり、人間以外の他の動物にも権利を認める視座を含むものとして解釈したりできるのかといった問題の解決に、部分的にではあっても寄与できるような答えを提示することが、本研究においては目指された。

３．研究の方法

本研究の方法は、大きく二つに分けられる。第一に、正義さらには広く正しさにかんする西洋中世の理論を、現代の倫理学的な文脈のなかに置き直すことである。第二に、トマス・アクィナスが問題に取り組むさいに、正義論を含むアウグスティヌス的な伝統的教説をどう批判的に捉えるのかを明確にして、トマスの答えを検討することである。

４．研究成果

（１）3 年間の研究期間（2021 年度から 2023 年度まで）内に公刊された論考には、以下のものがある。

（ア）「共通善とはどのようなものであるのか？――西洋古代・中世の二つの見解」、『福音宣教』2021 年 6 月号 75(6) 26-32、2021 年 5 月
（イ）「トマス・アクィナスの原罪論――彼のキリスト教的人間観の一面――」、上智大学中世思想研究所（編）『「原罪論」の形成と展開――キリスト教思想における人間観――』、知泉書館、213-244、 2021 年 7 月
（ウ）「性向あるいは徳としてのカリタスにかんする若干の考察（上）――トマス・アクィナス『命題集注解』の場合――」、『龍谷哲学論集』、龍谷哲学会（36）1-15、2022 年 1 月
（エ）「性向あるいは徳としてのカリタスにかんする若干の考察（下）――トマス・アクィナス『命題集注解』の場合――」、『龍谷哲学論集』、龍谷哲学会（37）29-38、2023 年 1 月
（オ）「トマス・アクィナスの貪食論――西欧中世における食の倫理の一側面――」、『世界仏教文化研究論叢』、世界仏教文化研究センター（62）147-177、2024 年 3 月

論考（ア）について。アウグスティヌスにおいてもトマス・アクィナスにおいても、正義は、自分一人だけにとっての善ではなく、人間が集団として追求する「共通善」を対象とする徳として位置づけられる。そして、リパブリカニズムが共通善を中心に据える思想的立場であるとすれば、彼らの正義論もこの立場と親和的である可能性が生まれてくる。そこで、この可能性を検討するための基礎を固めるために、論考（ア）では、トマスにおける共通善の性格を、その主要な思想的源泉と見なされるアリストテレスにおける共通善の性格とともに明らかにしようとした。論考（ア）の成果を要約すれば、以下のようになる。すなわち、アリストテレスが『政治学』第 3 巻第 6 章を中心に説くところでは、人間が国を形成するのは自然なことであり、共通の利益つまり共通善が人びとを結びつける。共通善には、物質的なものと非物質的・道徳的なものがあり、後者の共通善には、人間が善・悪や正・不正を判断し、立派に生きるための規範性が含まれる。人間は理性と言葉を用いて他者と交わることで、立派に生きるための素質を開花させるようになる。他方、トマスが『カリタスについての定期討論集』第 2 項において論じるところでは、共通善は、地上の国と天上の国のどちらにおいても、市民たちを結びつける愛の対象である。トマスは、アリストテレス哲学を最大限に活用しつつも、そこにキリスト教的な視点を加え、人間が神の恩寵によって天上の国の市民となることを強調する。地上の国の市民たちにとって共通善を愛することが善く生きるために必要であるように、天上の国の市民たちにとってもまた神を共通善として愛し、他の市民たちを押し退けることなく隣人たちとして愛することが求められるのである。

論考（イ）について。トマスに特徴的な正義理解の一面は、旧約聖書『創世記』に描かれる人祖アダムが最初の罪を犯す以前に有していたとされる「原義」に認められる。トマスは『神学大全』において、カンタベリーのアンセルムスに従って原罪を原義の欠如とする文脈において、原

義を論じることから、この文脈のなかで、原義に認められる正義の側面を解明しようとしたのが論考（イ）である。論考（イ）は、大きく二部に分けられる。第一部においては、第一に、トマスが、アリストテレス的な哲学原理を使用することによって、以上のようなアンセルムス的な原罪理解を、原罪をある意味では欲情であるとするアウグスティヌス的な原罪理解と総合していることが確認される。第二に、アダムが犯した罪が彼の子孫つまり人類に伝わる仕方について、トマスが、アウグスティヌス的な伝統に立つペトルス・ロンバルドゥスとは、理解を異にしていることが指摘される。第二部においては、トマスの人間観が、原罪についての以上のような理解をその根底に据えることによって、どのような特徴を備えることになっているのかが明確にされる。見逃されてはならないその特徴の一つは、人間は原義を失っているからこそ、神とのあいだに所有するべき正しい秩序関係を形成するべく、正義をはじめとする諸徳を身につけなければならないと、トマスが考えていることである。つまり原義の考えを含むトマスの原罪論は、徳論を中心とするようなトマスの倫理学的人間論の不可欠の前提として機能しているのである。

論考（ウ）ならびに論考（エ）について。論考（ア）において触れたように、正義は共通善を対象とする。そのさい、トマスの考えでは、人間が共通善を正しく志向するには、「カリタス」という愛を必要とする。しかし、その本性は何であるのかという疑問が生じる。そこで、『命題集注解』に依拠して、カリタスの本性についてのトマスの理解とその意義を確認しようと試みたのが、論考（ウ）ならびに論考（エ）である。ロンバルドゥスは『命題集』において、カリタスが聖霊そのものであると主張し、人間が神と隣人を愛するようになる所以のものは、人間の魂に宿る聖霊であると考えた。しかし、トマスは同書に寄せた注解を著すさいに、ロンバルドゥスのこの学説を厳しく批判し、カリタスは、たしかにそのような所以のものであるにしても、聖霊そのものではなく、神の側から人間の本性に付加され、この本性を完成する徳でなければならないと主張した。ここで確認されるのは、論考（ア）において見たような、人間が天上の国に入ることを可能にするカリタスの本性についてのトマス的な理解だけではない。ここには、現代においても、カリタスを語源とするチャリティに見られるような、人間が国籍とは無関係に貧者・困窮者に手を差し伸べる愛の本来的な基盤を、理論的に整理された形で見出すこともできる。すなわちトマスは、ロンバルドゥスのカリタス理解に潜む問題を克服し、新たに、人びとが地上における国と国との違いを超えて互いに愛し合うことを可能にするような徳として、カリタスを位置づけたのである。

論考（オ）について。以上のように、愛とともに正しさは成立する。しかし、正しさそのものは、何によって確保されるのか、という問題が起こる。この問題を、現代の食倫理学においても検討されるような、食物や食べ方にかんする個人的な行為の場面に絞り、西洋中世思想の立場から答えを与えたのが、論考（オ）である。具体的には、トマスが『神学大全』と『悪についての定期討論集』において「貪食」を取り上げるさいに、グレゴリウス一世のような、理念的にはアウグスティヌスに依拠する教父の見解を大いに尊重しながらも、独自に議論を展開していることに注目し、トマスの答えが二通りの仕方で与えられていることを確認した。すなわち、第一に、倫理学的な観点からすれば、正しさは、理性の秩序あるいは規則によって保証され、この秩序あるいは規則に反するとき、食は不正なものとなる。第二に、キリスト教倫理学の観点からすれば、正・不正は神との関係において決まり、神が軽んじられ崇められないとき、食は大罪あるいは小罪となる。以上のようなトマス的な回答は、第一に、食のキリスト教的な理想を提示するものとして、第二に、禁欲主義と享楽主義を避ける中庸を示すものとして、特徴づけられる。同時に、この回答は、食べることが悪にも罪にも陥らず、正しくおこなわれるためには、理性の秩序あるいは規則に従うことだけでなく、徳――例えば節制や思慮――を身につけることも必要であることを示唆するものとしても理解される。

（２）3 年間の研究期間（2021 年度から 2023 年度まで）内に、西洋中世学会のシンポジウムと、京大中世哲学研究会の研究会、それに倫理学的政治学科研研究会(あるいはワークショップ)において、口頭発表を単独でおこない、そのご、この口頭発表を踏まえた議論を参加者とおこなった。

（カ）「トマス・アクィナスによる狭義の正義論」（京大中世哲学研究会 第 267 回研究会、2021 年 9 月 11 日）
（キ）「トマス・アクィナスの神学的体系における政治学と倫理学の関係」（西洋中世スコラ学における「倫理学を内在化する政治学」への批判的研究、第 1 回倫理学的政治学科研研究会、 2021 年 9 月 20 日）
（ク）「性向あるいは徳としてのカリタス――トマス・アクィナス『命題集注解』による――」（西洋中世スコラ学における「倫理学を内在化する政治学」への批判的研究、第 1 回倫理学的政治学ワークショップ、2022 年 3 月 18 日）
（ケ）「トマス・アクィナスの神学大系における動物の地位と人間によるその取り扱い」（西洋中世スコラ学における「倫理学を内在化する政治学」への批判的研究、第 2 回倫理学的政治学科研研究会、2022 年 9 月 24 日）
（コ）「西洋中世における人間と動物の関係――トマス・アクィナスの思想の一面――」（西洋中世学会 2023 年度大会シンポジウム「西洋中世における人と動物」、2023 年 6 月 18 日）

(サ)「トマス・アクィナスの神学大系における人間による動物の支配」(西洋中世スコラ学における「倫理学を内在化する政治学」への批判的研究、第 3 回倫理学的政治学科研研究会、2023 年 9 月 11 日)
(シ)「トマス・アクィナスの貪食論――西欧中世における食の倫理の一側面――」(京大中世哲学研究会第 275 回研究会、2023 年 9 月 23 日

以上の口頭発表とそのごの議論には、(1)の研究成果に繋がったものも多い。すなわち、(1)の論考(オ)は、口頭発表(シ)をも踏まえてテキストを再検討し、内容のいっそうの掘り下げをおこなったものである。例えば、「理性の秩序」という概念は、文字通りには、偽ディオニュシオス・アレオパギテスという教父の著作によるとされていても、じっさいには、アリストテレスが『ニコマコス倫理学』において示す考えとも合致することが、論考(オ)において、いっそう明確になった。さらに、(1)の論考(エ)は、やはり口頭発表(ク)をも踏まえて、加筆と修正をおこなったものである。

またある口頭発表とそのごの議論が、別の口頭発表の論点を掘り下げることに役立った事例もある。例えば、人間が人間以外の他の動物を虐待することを、トマス・アクィナスは、現代の功利主義的な、動物の権利論者とは異なる仕方で禁止する。トマスのこの考えは、口頭発表(ケ)において素描されたのちに、いっそう整理された形で、口頭発表(コ)に組み込まれることになった。この(コ)の内容は、以下のようにまとめられる。すなわち、トマスは『神学大全』において、環境倫理学的に言えば人間中心的な立場を取り、人間による人間以外の他の動物の支配を肯定する。ただし、トマスの想定するその支配は、道理・法に従って正しくおこなわれる限り、専制君主的な支配ではなく、管理者的な支配である。またこのとき、トマスは明示的にも潜在的にも、人間以外の他の動物に権利を認めるわけではない。しかし、トマスの考えには、法による支配や徳の涵養を理由に、人間が人間以外の他の動物を虐げることに否定的であるところが認められるのである。

口頭発表のなかには、以上のような(コ)の内容や、(カ)で確認した内容――トマスの狭義の正義論は、現代のアリストテレス研究の観点からすれば、『ニコマコス倫理学』第 5 巻の誤った解釈に立脚していると見なされること――のように、現時点においては、公刊できていないものも含まれる。公刊を意識しながら、引き続き研究を進めたい。

(3)3 年間の研究期間(2021 年度から 2023 年度まで)内に、人間の行為の正しさや、人間と他の動物のあいだのあるべき正しい関係と関連する、以下の書籍あるいは論文の紹介記事を、『西洋中世研究』あるいは『中世哲学研究』VERITAS に単独で執筆した。

(ス)海外雑誌論文紹介 Macdonald, Paul A., Jr. 2021. "Acknowledging Animal Rights: A Thomistic Perspective" *American Catholic Philosophical Quarterly* 95, pp.95-116. (『中世哲学研究』VERITAS、京大中世哲学研究会 (41) 57、2022 年 11 月)
(セ)海外雑誌論文紹介 Maddeford, Aaron. 2022. "Obedience, Conscience, and Propria Voluntas in St. Thomas" *The Thomist* 86, pp.417- 444.(『中世哲学研究』VERITAS、京大中世哲学研究会 (42) 61-62、2023 年 11 月)
(ソ)新刊紹介 Nigel Harris, *The Thirteenth-Century Animal Turn: Medieval and Twenty-First-Century Perspectives*, Palgrave Macmillan, 2020, 131p., $64.99 (『西洋中世研究』、西洋中世学会 (15) 184、2023 年 12 月)

以上の書籍あるいは論文を紹介する記事の執筆を通して、(1)と(2)の研究成果をあげるのに寄与するような、以下の知見を得ることができた。すなわち第一に、論文紹介(セ)においては、人間の行為の正しさを考える上で不可欠な、良心や意志といった概念の持つ意味や役割を確認できた。第二に、論文紹介(ス)においては、人間以外の他の動物に権利を帰そうとする現代的な議論の重要性と、この種の議論を少なくともそのままの形では中世の正義論・権利論に導入できないことを、第三に、新刊紹介(ソ)においては、「動物論的転回」と呼ばれる、動物への 13 世紀に特徴的な認識の深まりを、それぞれ知ることができた。

(ソ)で取り上げた Harris の著書は、本研究の思想的背景を押さえる上で有益であるだけでなく、研究課題「13 世紀前後の西欧における人、動物、動物表象の関係性を巡る学際的研究」(24K03801)の視点を設定する上で重要な役割を果たしてもいる。本研究報告書執筆者は、この研究課題に、2024 年度から研究分担者として加わることから、今回(ソ)で得た知見を、その研究の完成のために、引き続き大いに活用するつもりである。

以上

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計9件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 山口雅広	４．巻 42
２．論文標題 海外雑誌論文紹介 Maddeford, Aaron. 2022. “Obedience, Conscience, and Propria Voluntas in St. Thomas” The Thomist 86, pp.417- 444.	５．発行年 2023年
３．雑誌名 中世哲学研究 VERITAS	６．最初と最後の頁 61-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山口雅広	４．巻 41
２．論文標題 海外雑誌論文紹介 Macdonald, Paul A., Jr. 2021. "Acknowledging Animal Rights: A Thomistic Perspective" American Catholic Philosophical Quarterly 95, pp.95-116.	５．発行年 2022年
３．雑誌名 中世哲学研究 VERITAS	６．最初と最後の頁 57-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山口雅広	４．巻 62
２．論文標題 トマス・アクィナスの貪食論――西欧中世における食の倫理の一側面――	５．発行年 2024年
３．雑誌名 世界仏教文化研究論叢	６．最初と最後の頁 147-177
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 山口雅広	４．巻 50
２．論文標題 スピノザの『デカルトの哲学原理』――新訳刊行に寄せて	５．発行年 2024年
３．雑誌名 龍谷哲学	６．最初と最後の頁 11-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 山口雅広	4．巻 15
2．論文標題 新刊紹介 Nigel Harris, The Thirteenth-Century Animal Turn: Medieval and Twenty-First-Century Perspectives, Palgrave Macmillan, 2020, 131p., $64.99	5．発行年 2023年
3．雑誌名 西洋中世研究	6．最初と最後の頁 184-184
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 山口雅広	4．巻 37
2．論文標題 性向あるいは徳としてのカリタスにかんする若干の考察（下）――トマス・アクィナス『命題集注解』の場合――	5．発行年 2023年
3．雑誌名 龍谷哲学論集	6．最初と最後の頁 29-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 山口雅広	4．巻 49
2．論文標題 環境問題と倫理学	5．発行年 2023年
3．雑誌名 龍谷哲学	6．最初と最後の頁 10-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 山口雅広	4．巻 36
2．論文標題 性向あるいは徳としてのカリタスにかんする若干の考察（上）――トマス・アクィナス『命題集注解』の場合――	5．発行年 2022年
3．雑誌名 龍谷哲学論集	6．最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 山口雅広	4．巻 2021年6月号
2．論文標題 共通善とはどのようなものであるのか？――西洋古代・中世の二つの見解	5．発行年 2021年
3．雑誌名 福音宣教	6．最初と最後の頁 26-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 山口雅広
2．発表標題 トマス・アクィナスの神学大系における動物の地位と人間によるその取り扱い
3．学会等名 西洋中世スコラ学における「倫理学を内在化する政治学」への批判的研究 第2回倫理学的政治学科研研究会
4．発表年 2022年

1．発表者名 山口雅広
2．発表標題 西洋中世における人間と動物の関係――トマス・アクィナスの思想の一面――
3．学会等名 西洋中世学会2023年度大会シンポジウム「西洋中世における人と動物」（招待講演）
4．発表年 2023年

1．発表者名 山口雅広
2．発表標題 トマス・アクィナスの神学大系における人間による動物の支配
3．学会等名 西洋中世スコラ学における「倫理学を内在化する政治学」への批判的研究 第3回倫理学的政治学科研研究会
4．発表年 2023年

１．発表者名 山口雅広
２．発表標題 トマス・アクィナスの貪食論――西欧中世における食の倫理の一側面――
３．学会等名 京大中世哲学研究会第275回研究会
４．発表年 2023年

１．発表者名 山口雅広
２．発表標題 トマス・アクィナスによる狭義の正義論
３．学会等名 京大中世哲学研究会 第267回研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 山口雅広
２．発表標題 トマス・アクィナスの神学的体系における政治学と倫理学の関係
３．学会等名 西洋中世スコラ学における「倫理学を内在化する政治学」への批判的研究 第1回倫理学的政治学科研研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 山口雅広
２．発表標題 性向あるいは徳としてのカリタス――トマス・アクィナス『命題集注解』による――
３．学会等名 西洋中世スコラ学における「倫理学を内在化する政治学」への批判的研究 第1回倫理学的政治学ワークショップ
４．発表年 2022年

〔図書〕　計1件

１．著者名 上智大学中世思想研究所(編)，宮本久雄，津田謙治，出村みや子，佐藤真基子，山田望，矢内義顕，佐藤直子，山口雅広，辻内宣博，鶴岡賀雄	４．発行年 2021年
２．出版社 知泉書館	５．総ページ数 352
３．書名 「原罪論」の形成と展開――キリスト教思想における人間観――	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関